

びわこ版

米川ビワマス調査 協力を

長浜の地域づくり連合会など

長浜市の中心市街地を流れる米川で、長らく姿が見られなかった琵琶湖固有種のビワマスの遡上や稚魚が琵琶湖に下る様子が近年確認されている。長浜まちなか地域づくり連合会と長浜まちづくりセンターは、米川での調査を開始。住民らから、目撃情報や映像などを募っている。

(松本芳孝)

2021年11月、長浜赤十字病院近くで見られた産卵前のビワマス。今年4月には、JRが撮影された。米川は、同市川崎町の湧き出る成魚の動画が撮影された。中、稚魚が見つかり、映像。水を水源に琵琶湖に流れ込

①長浜赤十字病院近くで見られた産卵前のビワマス
②2021年11月、長浜市で琵琶湖に下る途中で見つかったビワマスの稚魚。今年4月、長浜市で



目撃情報や映像募る

む1級河川。かつては普通にビワマスが見られたが、生活排水などで水質が悪化していった。

下水道事業が進んで水質は改善されていき、05年ごろに水質基準の一つ、生物化学的酸素要求量(BOD)が3㎖を切り、水道水としてぎりぎり使用可能で、マスを含むサケ科の魚類やアユなどの飼育が可能な水準になった。17年ごろからは、ろ過するだけで水道水にできる水準の1㎖程度になった。

米川にビワマスが戻っていることを知った連合会とセンターは、自然豊かで美しい米川で子どもたちが生き生きと遊ぶ風景をつくり出す「米川ビワマスプロジェクト」の一環として調査を決めた。過去の情報も集め、ビワマスが暮らす都市部の川としての価値を高めていく。

調査のほか、元県水産試験場長で、県立琵琶湖博物館特別研究員の藤岡康弘さ

んの協力で、10月中旬に市中心部の轡橋、曳山博物館、稲荷橋付近で川底を耕し、ビワマスが産卵しやすい環境をつくる活動もする。

センターの尾崎栄治所長は「1950年に米川支流を愛する会(59年から米川支流環境づくり協議会)を立ち上げた故片野喜代士さんは『子どもの時、窓からビワマスをつかんだんや』との言葉を残した。先人の思いを継ぎ、プロジェクトを実現させたい」と話している。

プロジェクトを含む「米川かわまちづくり事業」は平和堂財団環境保全活動助成事業「夏原グラント」の助成と、NPO法人近江淡水生物研究所の協力を得ている。米川のビワマス情

報はセンターと、調査の入力フォーム

で受け付ける。

長浜まちづくりセンター
0749(62)18008

